マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦没者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1―8―2
電話 03―661―8760
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　佐藤宗丕

この礁の何処に果てし君なるや
足裏の砂に血のほてりくる

テラオイ　ベシオ市長も参加された歌碑の除幕式
11頁参照

昭和六十二年 慰霊祭・総会

石谷典夫

未だ暁に至らぬ時刻、今年度、始めて役員として迎えた慰霊祭である。緊張の為か、もう目が醒めていた。

靖国神社参集所では八時前から、役員が受付の準備等各分担の仕事に追われる。神社の御本殿は全面解体修理中のため、十時からの昇殿参拝は御本殿と拝殿の間にしつらえた、仮本殿で執り行われた。

定刻、神官の先導で拝殿へ。例年のこと乍ら、厳粛になる一瞬である。テープによる国歌が神域に流れ、修祓献餞に続き、祭主の祝詞奏上。祭文は会長が起草し、一月二十五日の役員会で全員一致で決定した通りであったが、神前で瞑目して拝聴すれば、生前の故人の姿が脳裡に去来し、感一入。

玉串奉奠は次の方々が代表された。

会長、会友代表の篠崎英夫様、母代表の水野はな様、妻代表の佃喜美様、兄弟姉妹代表の富田ミツ様、子供代表の菅谷喜代子様、孫代表の田賀茜様の七名。慰霊祭も、とどこうりなく終り、十時四十五分から、参集所において、定期総会が開かれた。高橋（功）幹事の司会で大高常任幹事が議長となり、議事が進められた。

先ず会長挨拶に続き、去年度の会務経過。田中常任幹事から決算（別表）を、更に高橋（鎮）監事から監査結果が報告され、一括審議の結果、満場一致、異議なく承認された。

次に会長から、会則中の「終身会員制度」を廃止するため「会則第十一条中、第二項および第三項を削除する」ことを提案し、異議なく可決された。

目次

慰霊祭・総会……石谷　典夫……1
初めての慰霊祭……宮城　勇……2
御縁に感謝して……堀尾　藤吉……3
玉砕の島から夫の辞世……中村　サタ……4
本年度役員等決定……5
会友芳名（2）……6
お便りの中から……佃　喜美……6
……谷　正文……6
「酋長の娘」いまは……安東　正夫……6
マーシャル群島の御霊安らけく……山下　治……7
紺碧の空、潮高鳴る所……高橋　克麿……8
マーシャル諸島情報……9
サンゴの島に鎮魂の歌碑……10
お便りの中から……下里　梅子……11
……秋本　英郎……12
……橋本　政江……12
副会長の大役をお受けするにあたって……佐竹　エス……13
談話室……13
……大橋　サク……13
……安藤　啓次……14
……峯島治一郎……14
……星野　綾子……14
……大石　純一……14
……中野フヂエ……15
寄付者芳名……15
本部だより……16

次に会長から新年度の会務計画案を、田中常任幹事から予算案（別表）の説明があり、審議の結果、承認された。次に議長から任期満了に伴なう役員選任について、一月二十五日の役員会で、会長と監事の候補者を選考したことを述べ発表したところ全員賛成して決定。副会長以下の役員については、新会長が後日指名して、次号の環礁紙上に発表することで了解を得た。

今回の慰霊祭に参加申込みをされた方は、一四一名であったが、実際に参加されたのは、一九四名を数え、特に若い世代の同伴者が多く見られたことは、本会の今後の発展、継承の為に、心から意を強くした次第である。これは次の時代を考慮し、若い人達にも是非参加していただこうと、慰霊祭の日を「日曜日」に変更した効果が確実に反映され、会存続の前途に明るい展望が開けたものと、役員一同感銘を受けている。

◇　◇　◇　◇

慰霊祭・総会を終えて神苑に出れば二月初めとは信じられない初春を感じさせる好日和。直会参加者は待機していたハトバス提供の新型デラックスバスで一路東名高速を伊豆山水葉亭に向かう。

早朝からの緊張が解けて、顔見知りとの歓談で車内は大賑やか。

高林幹事編集の、軍国歌謡VTRは、在りし日を回想させるに効果満点。

初めての慰霊祭・直会旅行

（クェゼリン）宮城　勇

今年は全国的に春の訪れが早い、とニュースは報じていますが御地ではいかがでしょうか。

過日挙行された靖国神社での慰霊祭には母が大変お世話をいただいたとの事、心から感謝申し上げます。

初めての慰霊祭参加で、やや不安を抱きながらの参列でしたが、お蔭様で実に有意義な日々を過ごしたと帰ってから喜んでおります。

慰霊祭は無論のこと式典終了後の熱海への一泊旅行も愉快で、車中やホテルでの皆様方との歓談が特に印象に残ったとのことです。

母はどちらかというと旅は苦手で、日頃は敬遠しているのですが、今回の旅行は例外で手放しで賞讃しています。機会をつくり私も是非一度は慰霊祭に参加させていただこうと考えております。

季節の変り目ですからお体に留意され益々ご活躍されますことをお祈り申し上げております。

いつの日か皆様お揃いで南国沖縄へもぜひおいで下さい。

終りになりましたが、母への皆様方の御厚情に深く感謝し、お礼の拙文と致します。

〒901－21沖縄県浦添市字屋富祖184
宮城幸子の長男

祭文

謹んで大東亜戦争中マーシャル群島ギルバート諸島及びその周辺海域で散華されました三萬余柱の御霊に申し上げます

先の大戦は遠くは元寇近くは日清日露の戦役にも優る大きな試練でありました

皆様方は祖国の危急存亡の秋に際会し国家の要請によって防人の本分を尽し遂に尊いお命を祖国に捧げられました

祖国の命運を賭けての聖戦の時に刈るべき敗戦の憂き目を見ましたのは一億国民痛恨の極みでも在りました

荒廃した国土に立たされた私共遺族は一致国民以上の苦難の途を余儀なくされましたが南溟に散華された皆様の御遺志が家族の幸福と国家の安寧にあったことを慮り必死となって幾多の困難を乗り越えて今日に到りました

御霊の御加護により今や我が国は未だ曾て例を見ない平和と繁栄の恩恵に浴し国際社会に於きましても枢要な地位を占めるに到りましたが之に応じ祖国と同胞の平安を念じつつ散華されました皆様方の尊い献身が礎となっているのであります

星霜既に四十餘年往時の悲痛な歴史も次第に風化しようとする昨今ではありますが私共は折に触れ在りし日の皆様方に心を通わせております

国民の一部には今日の平和のよって来たる所を顧みず之れを当然のごとく思い暖衣飽食享楽のみを追う規潮の見られるのは時勢の推移とは謂へ嘆かわしいことであります

更に憂慮に堪えないのは靖国の神霊に対する為政者の対應であります

本来国家の要請によって戦場に赴き尊いお命を国家に捧げた崇高な行為は国家国民が之を讃仰し感謝し慰霊の誠を尽すのは世界共通の道徳でありますが我が国に於いては未だに占領政策の呪縛が効を奏しつつ為政者自らが靖国の神霊に非礼を重ねるのは詢にお恥しい限りで申し訳ない次第であります

皆様方の遺徳を体し活き活き直き心を永く継いで祖国日本の平和と繁栄のために尽すことにあるように思いを致し不断の努力をお誓い致します

何卒我々の進路を照覧賜わるよう併せ神霊遥永に安らけく鎮まえましませと心よりお祈り申し上げます

昭和六十二年二月八日
マーシャル方面遺族会
会長　佐藤宗正

御縁に感謝して

（マロエラップ）堀尾藤吉

私は二人の弟をマーシャル群島のマロエラップ島と、マリアナ諸島のテニヤン島に於いて国に捧げました。

テニヤン島の方は岐阜マリアナ会がありまして、遺族と生還者合同の会ですが、その案内によりサイパン、テニヤンへ巡拝し慰霊碑開眼供養に参列する事が出来深い感激にむせびました。

マーシャル群島は何分にも遠距離なので、半ば諦らめていましたが、この遺族会に入れて頂き「環礁」を拝見し、その御縁で昭和五十七年の厚生省巡拝団に参加することが出来、マロエラップのタロアー島での慰霊祭に参加し慰霊碑に故郷から持参したお酒をかけて冥福をお祈りしました。多年の宿望が叶い、こんなに嬉しいことはありませんでした。

その後「環礁」にて靖国神社の慰霊祭並びに直会旅行があることを知り、是非参加したいと思い乍らも、意にまかせず機会を失っていましたが、今回初めて参加できました。

慰霊祭につきましては、地元高山市に飛騨護国神社があり私も役員の末席を穢していますので、春秋の例大祭を初め、年間十回に亘る祭典に参列しています。本社の靖国神社は此の度で三回、昇殿参拝をさせて頂き感激を新たにいたしました。（次頁へつづく）

第23期決算報告書（自昭和61年1月1日　至昭和61年12月31日）

マーシャル方面遺族会

1　一般会計収支計算書

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	1,039,004
会費（過年度分）	128,000
会費（当年度分）	1,283,000
寄附金等	2,133,273
受取利息	337,968
雑収入	52,500
（小計）	(3,934,741)
合計	4,973,745

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	1,323,175
運営費	580,050
刊行費	631,870
印刷費	9,500
通信費	157,270
事務用品費	15,086
会議費	194,410
雑費	19,520
振替払込料	39,430
公租公課	71,146
特別会計へ繰入	500,000
（小計）	(3,541,457)
次期へ繰越	1,432,288
合計	4,973,745

2　一般会計財産目録（昭和61年12月31日現在）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
普通預金	19,340	前受会費（62年度分以降）	780,000
金銭信託	221,440	預り金（直会旅行費）	567,000
中期国債	1,026,015	預り金（宿泊料）	43,800
通知預金	1,379,353		
郵便振替	176,940		
		（小計）	(1,390,800)
		次期へ繰越	1,432,288
合計	2,823,088	合計	2,823,088

3　特別会計　（現地慰霊碑維持基金勘定報告）

収入の部		支出の部	
前期より繰越	7,000,000	当期支出	0
当期収入（一般会計より）	500,000	次期へ繰越	7,500,000
合計	7,500,000	合計	7,500,000

（注）定額預金並びに貸付信託として保管

昭和62年2月8日

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

監事　髙橋鎭夫
〃　柴崎晃

マーシャル方面遺族会
会長　佐藤宗丕

第24期一般会計予算

（自 昭和62年1月1日
至 昭和62年12月31日）

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	1,432,288
会費	1,300,000
寄附金等	1,850,000
受取利息	350,000
雑収入	50,000
（小計）	(3,550,000)
合計	4,982,288

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	1,150,000
運営費	600,000
刊行費	650,000
印刷費	10,000
通信費	160,000
振替払込料	30,000
事務用品費	20,000
会議費	100,000
公租公課	70,000
雑費	20,000
予備費	50,000
特別会計へ繰入	1,500,000
次期へ繰越	622,288
合計	4,982,288

今年初めて待望の直会旅行に参加させて頂き、思いがけなく先に巡拝団で一緒だった芳賀さんにお会いできて旧懐を温め、共に参加できた喜びを語り合いました。車中では高林幹事の編輯した懐しい軍歌ビデオの放映で画面と歌詞、音響の美事な編輯振りに感嘆しながら、唱和して在りし日を偲び、和気あいあいの内に熱海伊豆山の水葉亭に着きました。

豪華な王朝風の大浴場で汗を流し、一息入れて後の懇親会、これらの設営に当られた役員諸氏に感謝の念一入でございました。懇親会の乾杯の際、熊本の片山れい子さんの言葉の間に謡曲「寿の一節」を入れさせて頂きましたところ破格のおほめを頂き光栄に存じました。

翌日は天下に名高いMOA美術館を拝観し、来年の再会を約して小田原で失礼しましたが、万事に行届いた計画とお世話ぶりに、役員諸氏の御苦労に何とお礼申してよいか、言葉もありません。只々厚くお礼申し上げます。

寿

大社　庭の老松百年の　年経るごとに色増り　君が齢を寿ぎて　枝に巣籠る親子鶴　永久に栄ゆく君が代を祝う今日ぞ　目出たき　祝う今日ぞ　目出たき

〒506 高山市下一之町21

〝55年7月20日読売新聞より〟

故郷の花火ににたり野戦哉

玉砕の島から〝夫の辞世〟

玉砕の島・中部太平洋クェゼリン環礁で戦死した日本兵の〝辞世の句〟が三十六年の歳月を経て、このほど発行の俳句誌「末黒野」（すぐろの）七月号で紹介されている。遺骨もない、遺品もない、一片の公報だけでしか確認しようがなかった夫の戦死。その面影を断ち切って再婚した妻のもとへ、死の直前まで夫がはだ身離さず持っていた手帳が、この春、奇跡的に返ってきたのだ。この手帳は、当時クェゼリンの戦場に上陸した元米軍人がアメリカへ持ち帰り保存していたが、初めて遺品と〝対面〟した妻は、ボロボロに朽ちていた手帳の一ページから、肉眼ではとても判読できない走り書きの句を見つけ出し、〝復元〟して、供養のたむけとした。

ことし四月二十二日――。横浜市金沢区西柴二五九で隠居暮らしをしている中村亀雄さん（六七歳）夫妻のところに、一本の国際電話が入った。アメリカからと聞いて、電話口に出た妻サタさん（六六歳）は一瞬、首をひねった。相手はワシントン州のベルビュー短大で日本学の講師をしている長谷川勝美さん（三二）。「突然で失礼ですが……」と前置きして、長谷川さんは思いがけない話を始めた。昭和十九年二月、マーシャル群島クェゼリン環礁で戦死したサタさんの前夫、高橋正一さん（海軍上等整備兵曹。当時三十歳）の手帳を預かっている、というのだ。

「まさか」と思った。戦後本籍地の秋田県庁で受け取った遺骨箱には、「高橋正一之霊」と書かれた紙が一枚入っていただけ。それからもう三十数年もたっている。どうして、いまごろ……。しかし、長谷川さんの話はうそではなかった。信じられない気持ちで電話を切ったサタさんのもとへ、四日後、航空便が届いた。

封を切ると、中から、表紙の取れた昭和十八年のボロボロの手帳が出てきた。縦十センチ、横八センチ。爆風を受けたのか上半分が縮んだうえ、二か所ほど横に深い裂け目が入り、しかも、それぞれのページがのり付けしたようにペッタリとはりついていた。はやる心をおさえ、サタさんは、それを一枚一枚、丹念にはがしていった。パリパリと音がしたが、中は空白ばか

り。が、何十枚かはがし続けて、ハッと息をのんだ。豆電球つきの拡大鏡で子細に追うと、かすれた鉛筆書きで、俳句が三句、確かに読み取れたのだ。

空晴れて　故郷偲ぶ　鯉のぼり
故郷の　花火ににたり　野戦哉
夜襲の　絶間の○○○　猫の声

間違いなく、夫正一さんの字だった。三句目の三字は、どう努力しても判読できず、伏せ字のまま句誌に掲載してもらうことにした。

長谷川さんに、この手帳を預けたのは、米カリフォルニア州サンジエゴ近郊で建設業を営むセオドア・フィノキアーロさん（五四）。一九四四年（昭和十九年二月、フィノキアーロさんは海兵隊の一員として日本軍のたてこもるクェゼリン環礁に上陸した。激しい戦闘が一段落して、負傷兵収容のため、なぎさを歩いている時、半分砂浜に埋まった、日本兵の手帳を見つけた。フィノキアーロさんは、湿り気を帯びた手帳をポケットにおさめると、戦後、アメリカへ持ち帰り、いつかは遺族に返そうと、自宅の机の引き出しに大切にしまっておいた。

長谷川さんが、知り合いのフィノキアーロさんから手帳を預かったのは昨年秋。「日本人なら遺族捜しができるかも」と託されたのだ。しかし、手がかりとなるような名前は、肉眼では発見できず、長谷川さんは、ワシントン州警察やシアトル警察などの力を借りた。特殊撮影の写真で、手帳の見返しから何とか浮かび上がったのが、「高橋正一」という四文字。名前がわかると、長谷川さんは米国から東京の読売新聞社に遺族捜しを依頼する航空便を出し、本社ではマーシャル方面遺族会の名簿からサタさんを捜し出し、長谷川さんに連絡した。

手帳には、俳句のほかは、知人の住所などが記されてあるだけだった。正一さんが俳句好きだったという記憶はサタさんにはない。その夫に、決してうまいとは言えない俳句を書かせたのは、二度と帰れないかもしれぬふるさとへの思いではなかったか。（以下割愛）

（クェゼリン）　中村サタ

戦死した夫の遺品の手帳が送られてきたのは昭和五十五年四月でした。

米軍の一兵士に手帳が拾われ、アメリカに住む長谷川勝美様が読売新聞社に調査を依頼し、マーシャル方面遺族会の名簿から私のことがわかったのでした。

読売新聞社から電話があって間もなく手帳の写真が届きました。開けた途端、私は全身から血が引いて倒れそうになり、主人は驚いて写真を仏壇に供えました。

一週程して手帳が届きました。白い紙に丁寧に包まれ、拾われた時その儘で、爆風で引き裂かれて縮み、戦争の悲惨さを思わせ、私は唯涙でした。

遠いアメリカからよく帰ってきてくれました。一日も早く故郷秋田で供養せねば、と主人に話し、近くに住む義弟亡夫の妹の夫にも相談したところ、「見せてくれ」、といわれ、妹の家へ持って行き手帳を置いてきました。

私は毎朝六時に目覚め、六時半に起きるのが習慣です。二日程して朝目覚めている筈の六時から夢を見たのです。結婚した当時の家に夫がいるのです。私は自分の泣き声で目が覚めました。丁度六時半でした。翌朝も又次の朝も、三日続けて、同じ時間に同じ様な夢でうなされ、自分の泣き声で目が覚めはっと気がつきました。

遠いアメリカから遙々三十七年振りに帰って来たのに、私は妹の所へ置いてきたのです。義弟に話しましたところ、「そんなバカなこと」と笑いましたが、私は手帳と共に霊がきたと確信しています。

一ケ月半程傍に置き、夫の憧れていた故郷秋田の実家へ遺品と二人で帰り法要して戴き、暫くは仏壇に置いて戴き、両親の眠る傍のお墓に納めていただきました。

夫と別れたのは二十九歳の時でした。三十一歳の若さで死なねばならなかった運命、戦争さえなかったら、と思い、毎日涙でした。人は死んでも霊はあるもの、としみじみ思い知らされ、毎朝毎晩仏壇に手を合せ冥福を祈りおります。

こんなよい世の中になったのは、国の為に犠牲になった人達のお蔭なのに、今の世の中は、総理大臣が靖国神社に参拝したと怒る人があります。靖国神社は国で経営してはいけないと反対するし、死んだ人達を可愛想と思わないのでしょうか、その人達の身内には、国の為に死んだ人はいないのでしょうか、国の礎になり若い命を捨てねばならなかった人達を考えて欲しいと思います。

再び戦争がおきるから、だとか、戦死を讃美するとか、そんな風に考えないでもっと素直に考えて欲しいと思います。

どのような事があっても、二度と戦争はあってはなりません。私達の様な苦しみを与えたくありません。

多くの戦死者は遺骨も遺品もないのに私は幸せにも夫が肌身離さず持っていた遺品を戴き、手帳を拾って長い年月大切に保管して下さり送って下さった、セオドア・フィノキアーロ様、長谷川勝美様、そして私を探して下さった読売新聞社、マーシャル方面遺族会の皆様に心から感謝いたしております。

私は今七十三歳になります。再婚した夫も五十九年十月、心筋梗塞でたった一日で亡くなり、義理の子供達も成人して、長い間の苦労も終り、残る余

生を花や小鳥を相手に、一人で平和に静かに一日一日を大切に過し、亡き人達の冥福を祈る日々でございます。これもよい世の中になったお蔭と感謝しております。

〒236横浜市金沢区西柴一―三一―二二

本年度役員等決定

本年度の役員、委員、篤志会員等が夫々次のとおり選任又は委嘱されました。

名誉会長　浮田信家
顧問　栗林徳五郎
相談役　朝香孚彦
会長　佐藤宗丕
副会長　佐竹エス
常任幹事　田中雄吉
同　畫間楽平
幹事　荒木常子
同　石谷典夫
同　黒川誠
同　高橋功
同　高林芳夫
同　山口良二
監事　柴崎晃
同　高橋鎮夫
委員　秋本英郎
篤志会員　石井清
同　大野克一
同　木ノ下甫
同　ジョン・ウイリース
同　新藤岩男
同　瀬沼光久
同　土屋太郎
同　徳原徳子
同　西村祐造
同　長谷川栄次
同　長谷川敏
同　本埜和昭
同　松平永芳
同　村瀬松雄
同　森山喜久雄
同　山村要
同　横溝幸四郎

☆広報委員
佐藤宗丕　佐竹エス　田中雄吉
畫間楽平　荒木常子　石谷典夫
山口良二　秋本英郎

☆直会委員
荒木常子　高橋功　高林芳夫

異動

厚生省援護局業務第一課長に村瀬松雄様が就任されましたので、本会の篤志会員を委嘱いたしました。

秋本英郎様を新たに広報委員に委嘱しました。

会友芳名（2）

昨年の総会で英霊と苦楽を共にした曽ての戦友その他心ある方々に、本会の活動に参加して頂けるよう会友の制度を設けました。

前号に発表した後、次の方々が会友として参加されました。（敬称略）

番号	氏名	都道府県
33	キリバス名誉領事室	東京
34	岡山尚信	三重
35	山下治	愛知
36	稲毛三郎	北海道
37	江藤圭一	埼玉
38	土屋太郎	神奈川

お便りの中から

（クェゼリン）佃喜美（75歳）

クェゼリン島にて玉砕と伝えられる佃敏郎の妻でございます。幸い健康に恵まれて喜寿近き今日まで、一人っ子の息子と嫁と孫三人に囲まれ東京に在住しております。

昭和五十年の夏、第一回の南方慰霊団に加えて頂き、マーシャル群島クェゼリン島に参拝して来ました。その事が私の心に残る只一つの思い出でございます。恐らくもう再びは見ることが出来ないでしょうが、南方のあの碧い空と水は私の脳裏を去る事がないと思います。

毎年二月に行われます慰霊祭には出来る限り出席して、全国のお仲間と共に世界の平和を願って生きたいと思います。それにつきましても全会員の名簿が有ったらと考えますが、いかがなものでしょうか。資金の面でも人手の面でも大変なこととは思いますが御考慮頂ければ幸いでございます。

尚、これもお金が必要なことで、どうかと思いますが矢張り会に専従の事務職員を置かれた方が良いように思います。本部役員様方のいろいろな面での御苦労を拝見していると、しみじみそう考えます。出来れば環礁の編集等も或程度、おまかせ出来るような方をと言うのは贅沢でしょうか。

〒154東京都世田谷区豪徳寺二―一―一〇

（ルオット）谷正文（59歳）

マジュロ島滞在の五日間、我々に接した島民の方々の人なつこい顔や、買物の時に親切に声をかけて呉れた事が忘れられません。

又、帰国の時空港まで大勢の方々が見送りに来て下さって、高価な花の首飾りや貝細工の首飾りをいただき感激しました。何分言葉が通じませんので、お礼も申し上げず、又何のお返しも出来なかったことが心残りです。

出来ますれば遺族会でお世話していただいて、有志だけでマジュロの皆様にささやかな贈り物をしたらと考えているものですが何如でしょうか。

役員の方々には大変世話のかかることでしょうが御一考下さいますようお願い申し上げます。

今年の靖国神社の慰霊祭に十年振りにお参りしましたが、十年前より参加者が多かったように思い、何時までも本会が盛大に続いていることを心強く感じました。今後共よろしくお願い申し上げます。〒624舞鶴市字別所七三七

マーシャル群島の旅

「酋長の娘」いまは

安東正夫

八重の潮路を越えてマーシャル群島への旅をはやらせたものに「酋長の娘」の唄の有り様を現実に確めて見たいとの少年時代からの潜在願望があずかっていたのは間違いない。一時代前の教科書の「トラック島便り」などの南洋の読み物や「冒険ダン吉」の漫画にも南洋への気持ちが呼び起こされはしたが、「酋長の娘」の唄に、より親しみを覚えたものである。特に〝色は黒いが南洋じゃ美人〟とか〝赤道直下マーシャル群島〟などの歌詞は、あの実に好ましいメロディーと共に、今に至るまで鮮烈に南洋、特にマーシャルのイメージを固めさせてくれた。（もっとも〝首の祭り〟などというのは現実に合わなかったが。）

戦後でも昭和三十年代の頃までは、親族や勤務先などの集まりで余興があると、明治、大正生まれの先輩たちが、よく即製の腰ミノをつけたり顔に墨を塗ったりして「酋長の娘」の仮装をして踊ることがあったものだ。そういう時には嬉しいやらおかしいやらで、大声でこの唄に唱和したのであった。近年ではいつしかそういう先輩たちも高年齢化してしまい、また若返った観客にはアピールしなくなったせいか、滅多にお目にかかれなくなってしまったのは寂しいことだ。それにマーシャル群島も大戦後期の玉砕や戦後も核実験、その副産物として女性の水着の名前の起源になるなど「酋長の娘」に比べて親しみがなくなってしまった。

さて、戦前昭和九年から南洋庁管内で使用されたいわゆる風景入りスタンプが九局分あり、いずれも良いデザインであるが、その一つにヤルート局のものがあるのを知っていた。この図案に見られるカナカ族の娘は、〝盛装した〟と説明文にある。ラプラプのような腰ミノに首飾りと花の耳飾りだけをつけ胸を丸出しにしたのが盛装なのだからおおらかなものだ。「酋長の娘」の変型された歌詞にも、そのような所があった。それに近年でもヤップ島やポナペ島ではわずかながらもそういう姿を目にしたことがあるので、本場のマーシャル群島ではいかにという興味もあったが。

戦前ヤルート郵便局の風景入りスタンプ

残念？ながら、いまマジュロの街で見かけた限り、マーシャルの娘たちは普通の近代的な洋装をしており、ジーパンをはいている者も多いが肌はあまり出していない。また、〝バナナの木蔭で眠る〟という典型的なわけにはいかなかったが、海岸近くの彼女たちの生活圏近くで出会う機会も多少はあった。私の方が海岸の木蔭で休んでいると突然横から現れて笑いかけて来たことがあった。彼女たち、炎暑の昼間は家の中に入っていることが多いようであるが、時々海岸にも出て来るのであろう。彼女たちと英語で少し話をしたが、概してあっけらかんとして親しみやすい。ただもうこの世代になると、日本の委任統治時代への関心は良かれ悪しかれ無くなって、せいぜい〝太平洋戦争（私は大東亜戦争というが）では善戦したとか、アメリカの次ぐらいに技術や経済の豊かな国というぐらいにしか思っていない。日本人の方で南洋群島に鎮魂の念や、愛着が絶ち難いとか、「酋長の娘」に郷愁を感ずるとか話してもその真意さえ分かってくれそうもない。どうも、こちらの片想いという感があった。

いや、冷静に考えてみれば、もともと「酋長の娘」の歌詞内容自体が必ずしも現実の生活一般を映したものではなかったのであろうか。それに、日本でも都市化が進めば祭りや盆踊りは浮き上がってしまうのと同様に、マーシャル群島でも少なくともマジュロでは自動車が普及し、洋装してスーパーに買い物に行くようになっては、「酋長の娘」も風化してしまうのは無理もない。唄のできた大正末期ならば、あるいはより現実に近かったのかも知れないが、それで踊ることがあったにせよ、それは彼女たち自身のためのもので、しかも特別の場合だけのものだったという気がする。今では、自分の恋人が踊り暮らすというあの歌詞にある〝土人〟の情熱的で原始的な解放感は当のマーシャル共和国の人々にとってさえも遠い世界になっているのではあるまいか。

実は、マジュロ滞在中の土曜日の晩だったかと思うが、娘たちが海岸の椰子林で踊るのを見てはいる。それは、現地のＰＴＡのようなグループが月明かりの下、鶏肉のバーベキューを囲み、缶入りコーラなどを飲みながら集まる所に、木の台を設け、テープから流れる音楽に合わせて、何人かの娘が踊る所であった。それはミクロネシアのものよりもむしろハワイやポリネシア系に近い印象であった。六人の少女が合わせて踊る可憐なもののクライマックスに、「酋長の娘」の面影を留めたグラマー娘が短時間だが大輪に踊った。もっとも風景入りスタンプの姿とは異なり、上下ぴったりのカラフルな布をまといその上からバナナのような腰ミノを着けていた（私のカメラでは暗く

て、かすかにしか写らなかったのは口惜しい）。もっとも少女の方は椰子の実の内殻を半分に割ったものを〝ブラジャー〟らしくつけていた。本当に「酋長の娘」だったのかは分からないが選ばれた娘であることは確かだ（小さいうちはスリムで可愛くてもこの娘のようにハイティーンぐらいから肥満する傾向もあるようだ）。

ともかく、こうした踊りに感じられるのは、もはや日常生活の中で普通に行われるのではなく、明らかに儀式化されており、今でも踊り好きなマーシャルの人々がそれを見物する、という形である。

こういう現実はやや物足りなかったが、それが外国人、特に日本人のためのショーではなかったのがせめてもの幸いであったと言いたい。

（南洋群島協会々報一五七号より転載）

マーシャル群島の御霊安らけく——

会友　山下　治

此の度慰霊巡拝団の一員に参加させて頂き、会長始め皆様から何かと御配慮賜り厚くお礼申上げます。

私は、昭和17年4月以降終戦迄ヤルート、マキン、ウオッゼの各島で海軍航空隊電信兵として勤務致しました。

心静かに往時を回想するとき、あの厳しく苦しかった戦況が昨日の事のように脳裡に浮んで参ります。

改めて今回同方面を訪れた御遺族様を始め、東太平洋方面戦歿者御遺族皆様に衷心からお悔み申上げます。又未だ彼の地、彼の海に眠る数多くの英霊の御冥福をお祈り致します。生還者として御遺族様の御期待に何等答えることが出来得ず、浅学非才な一兵卒の我が身が情無く皆々様に申訳けなく胸中に新たな何かを抱く様になりました。

戦後四十余年、何としてでも是非訪れてみたかったウオッゼ島に、チャーター機がさしかかると共に激しいスコールが全島を清めるが如く降りしきる中を着陸しました。出迎え下さった村長さんの御厚意で住民の見守る中、集会所で追悼式を挙行し、線香と遺族の合唱する般若心経の読経で涙雨も快よく晴れ上り、この島があの当時激しい砲爆撃で草木一つない焦土であったなど誰知る由も無い長閑な明るい南洋独特の風景で、四十年の歳月は椰子・パン・タコ・パパイヤ・バナナ・モンパ（兎の耳と称し飢餓と戦った兵士の食糧となった大きな葉）等が繁茂し、各所にある凹地は曽て爆弾の炸裂した穴で、つる草が一面に延びており所々に痩せ衰えた南瓜のつるが小さな黄色い花をつけておりました。

島の四方八方からオオ通信科の富永か、良く来てくれたと誰かに呼ばれているような気になり地に足はついていても内海方向は何処かすら判らず、何かにとりつかれた夢遊病者の如く感情のみが先行してしまいました。

年輩の住民数人に数度に亘りコーロン・パラオ90度角度を変えてトートンと指を示したところ、私が考えていた反対方向が八〇二海軍航空隊の陣地方向と判断したところへ、今次慰霊巡拝団が終始非常にお世話になったマジュロ島在住のカメラマン島田興生様の夫人と、ウオッゼ環礁に島を所有するカルメンさん（マジュロ在住）が来られ、島田夫人の現地語による洋上から飛び上る二式飛行艇の航空隊建物と方向の質問に、私知っていると先導して頂き、椰子、パンとつる草の茂る方向を示された。

お礼の言葉も忘れ一目散にジャングル方向に繁みを押し分け飛び込むと無残に崩れ傾く航空隊本部の建物を発見しました。

当時島には洋館二階建ての瀟洒な建物はこの航空隊本部と島最南端に建つ送信所の二つしか無く両横に二本の無線マスト（高さ20米位）を有していた為、常に砲爆撃の好目標となり終始激しい攻撃を受けた。

昭和19年2月13日10・10頃洋上スレスレの超低空で来襲したB25八機の水平攻撃の一弾が電信室二階右端の20ミリ以上ある鉄の扉を破り内部で炸裂したため電信当直についていた通信科の兵を主力に敵機来襲の都度一階を戦闘指揮所として使用奮戦中の八〇二航空隊司令鴨少将以下村上主計長等三十余名が一瞬のうちに吹き飛んだ終焉の地でもあります。

昭和19年2月22日鴨司令戦死後八〇二航空隊の陣頭指揮を執った高橋久麿通信長（海兵六五期）は空中の一点に弾は当らないと常に豪語し、当日も無線マスト（鉄塔）に上り一月30日以降毎日艦砲射撃を繰り返しているアメリカ機動部隊の戦艦3、巡洋艦、駆逐艦等多数の砲撃を受けた。その一弾がマスト中段に命中しマストは折れ曲り、陣頭指揮中の通信長、下士官一名は夫々壮烈なる戦死を遂げた。

四十年の歳月で鉄塔の腐蝕は甚しくアングルの一部は地上に落ち、折れ曲ったマストにはつる草が繁茂し覆いかぶさっていたが幸運にも発見出来た。

直ちに生還通信科有志から委託を受け持参した御供物と、島田夫人に依頼して準備した内地米の銀飯を供えた。

又、暗号の先任下士官と後警備隊指揮少隊長兼衛兵副司令の田幸少尉から委託埋葬せよと持参した次の短歌五首を読みあげ短冊をマスト下に埋葬した。

一、鴨司令に捧ぐ

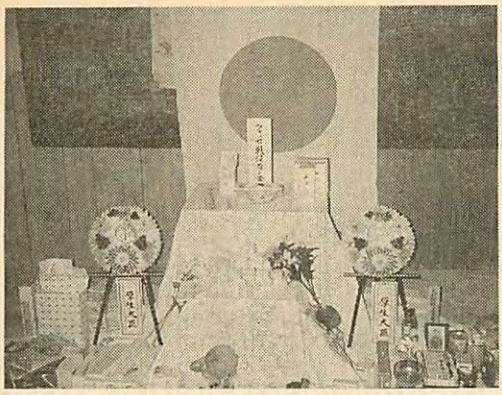
宮城に向い喇叭高らか　軍旗焼く

（故）鴨司令其の他数人

二、高橋通信長、掌暗号長、戦没通信員に捧ぐ

南瞑の涯なん島に　防人よ

吾ら戦友（ともがら）　永遠に鎮もれ



三、戦没の御霊に約束

海嘯と南十字に護らるる

眠れる御霊　永遠に言い継ぐ

四、亡き通信員の霊に捧ぐ

玉砕の平文作り兵は待つ

命ささぐる　悔更になし

五、我れ散ると打電の刻待つ予備壕の

電鍵握る　兵は神なり

栃木県知事から県代表の弔辞を受けて来た通信長の弟、克麿さんが持参した地酒を振りかけ廻る御心中は如何ばかりかと思われました。私は予想外に荒れはてたつる草繁茂する現場に直接御遺族を御案内したことが何か悪いことをしたような気になりました。直属の上司である鴨司令、高橋通信長、掌暗号長、先任下士等を失い、その後は終戦引揚げまで警備隊電信当直を交代で服務し四艦隊司令部（トラック）にウオッゼの状況を打電し続けました。指揮官を失った兵隊のあわれさを嫌という程体験し、かろうじて七名が生還しました。

その後私は高橋さん、島田夫人と兵舎跡、弾痕痛ましい水上戦闘指揮所、水上機桟橋、四トーチカ跡を巡り、二時間足らずの限られた時間の早さを恨み、自ら一年八ケ月も本拠とした通信科の壕方面を眺めつつ雑草の生い茂る南北滑走路を北側から集結地に向いました。

戦跡巡廻中は灼熱の太陽が照り輝いていたが、飛行機に乗る直前から激しいスコールに見舞われ、島全体が墓地であるウオッゼ島に我々巡拝団の別れの涙雨として降りました。

私には、ウオッゼに又来いよとの声なき命令と思われ頬を伝う涙と共に思い出の島を後にしました。帰途マロエラップに着陸し二五二空激闘の零戦の残がいを見た時、かつてヤルートにウオッゼに対潜哨戒に飛来した飛行機ではないかと思い、ルオットを基地にした22航艦から24航艦でウオッゼ、マロエラップ、ミレー、ヤルート、ウエーキの基地通信系で交信しあった往時を帰りの機上で静かに回想しました。

マーシャル諸島共和国の施政下にあるウオッゼ島も文化社会への洗礼を受けつつあるかに見受けられました。旧日本軍が放置した残がいが随所にあり、住民が椰子、パン等の主食の木を育てようとしても、コンクリートの滑走路、兵舎跡等の壁は厚く、素手で作業する住民には施す術も無く、雑草の繁茂するがままで我々には記念すべき戦跡であっても、住民には無用の長物で植林計画の支障になっているとの事です。生活環境の変化育成は徐々に見守るとしても日本軍の遺物は日本国の責任において早急に処理し、新しいマーシャル共和国と日本の友好を確立することこそ一敗残兵士として関係当局に望む唯一の希望です。

マーシャル方面遺族会が有志の方々の御努力で戦後早々に結成され、幾多の困難を経つつも今日迄の輝やかしい成果を伺って大変心強く感ずると共に皆々様の御労苦に対し、マーシャルからの生還者の一人として深甚なる謝意を表明する次第です。

（〒442 豊川市国府町上坊入45―15）

～～～

日章旗の前の祭壇に供物とともに遺族の読経もそえられ、万斛の思いでこの地に眠る英霊の鎮魂を祈りました。

島内調査に出る頃は青空となって草も乾き、それぞれの所属部隊の跡を求めて分散しました。慰霊団の中のかって在島した部隊の方には大変お世話になりました。とくに五三一空主計長の篠崎さん、八〇二空通信料の山下さんには兄の戦死した無線塔を探さねばと、ご自身の計画を捨ててご援助いただきご迷惑をおかけしてしまいました。

カルメンさんの案内で進む中、ジャングルの中に黒ずんだコンクリートの屋根が見えました。急いでカメラに収め、後を追い丈なす草を分けて本部跡に出たとき、一瞬足が動きませんでした。建物のまわりを英霊がとりまいているような、鬼気迫るような感じをおぼえたのです。

山下さんの呼ぶ声に促され、士官食堂のところから内海側に抜け説明を受けましたが、無惨に破壊された本部跡に戦死した方々の冥福を祈らずにはいられませんでした。兄の最期となった無線塔の下では山下さんと八〇二空の慰霊を行い、塔の上で奮闘した兄をしのびました。塔に行く途中、ふと幹だけのヤシを見て四十年前の砲爆撃の際もこうであったかと思い写真にとりましたが、あとで調べてみますとそのジャングルとなったヤシ林こそ鴨司令以下の勇士の眠る所のようです。偶然とはいえ、何かの因縁を感じた次第です。

限られた時間は短かく、全てを目に焼きつけようとしましたが、それも空しく帰る時間となり、島の人達に別れを告げる頃再びスコールです。雨の中手を振る島民に送られて離陸、万感の思いで振返りましたが、雨の中の島は機の背後で見えませんでした。誰かが言われましたが、英霊の涙雨だったのでしょうか。

帰途、ふと下を見ると雲上飛行するわが乗機の影が白い雲の上に十字架のように映りました。すると突然その十字架のまわりに黄金の光の環があらわれ、時には二重になって輝きいつしか消えていきました。自然現象とはいえ慰霊巡拝に対するマーシャルの神の祝福にも思えて、何か厳粛な感じにうたれ再び来ることを心に誓ったのでした。

最後に、今回の慰霊巡拝にあたり厚生省、マーシャル遺族会長さんはじめ事務局の方、八〇二空の方々に陰に陽にお世話になりました。とくにマジュロ在住の島田興生氏ご夫人には寝食を忘れてのお骨折り有難うございました。参加遺族中、私が一番の仕合せ者だったと思います。これも関係の皆様のお陰と、改めてお礼申しあげます。

（八〇二空高橋通信長の弟）

（〒320宇都宮市鶴田町二九二三―一）

マーシャル諸島情報

マーシャル・アイランズ・ジャーナル紙より

☆1月9日号より

86年コプラ生産

マジュロ発、1月5日

1986年12月31日に終った同年度のコプラ生産において、アルノ環礁が他の環礁をおさえて第1位となった。

アルノはマジュロのそばの小さな環礁であるが、1095トンのコプラを生産した。月平均91トンで最とも多い月は12トン、少ない月でも56トンのコプラを出荷した。

アイリングラプラプ環礁が第2位で957トン、ミリが第3位で746トンであった。以下エボン、ヤルート、ナムイ、ノーモリックと続く。

総計は6920トンで昨年の4302トンを大きく上廻り第2次大戦後の最高値7000トン（1971年）につぐ生産となった。

☆1月9日号より

新切手発行

マジュロ発、1月6日

マーシャル諸島の本年最初の切手が来週の月曜日に発行される。44セントもので4種類の鳥の切手である。

☆4月24日号より

ジェット機引き返す

4月22日

ホノルル行コンチネルタル・ミクロネシア航空便はそのエンジンの一つに故障が発生した為にマジュロへ引き返させられた。

エア・ミクロネシアのマネージャー

（以下16頁へつづく）

激戦地・タラワに夫への思い

サンゴの島に鎮魂の歌碑

〃62年3月30日北海道新聞夕刊〃

太平洋戦争の激戦地、タラワ島（キリバス共和国）で最愛の夫を失った札幌の老婦人がこのほど、同国ベシオ市の公園に夫への尽きぬ思いを刻んだ鎮魂の歌碑を建てた。「この礁の何処に果てし君なるや　足裏（あうら）の砂に血のほてりくる」。高さ五十センチ余りの碑に込められた戦争への憎しみ、夫への愛。碑の前で「私は軍国の妻にはなれなかった」と泣き崩れた老婦人のことを、現地の週刊誌、マーシャル・アイランズ・ジャーナルは、「彼女は四十年待った」と書いた。札幌市豊平区福住三ノ八、下里梅子さん（七五）。下里さんは海軍の兵曹長だった夫の学さんを昭和十八年十一月、赤道直下のタラワ環礁の激戦で失った。三十六歳だった。「やさしい人で幸せだった」という二人の結婚生活は十年しか続かなかった。昭和十六年に夫が召集された時、下里さんにはまだ小さな長男と、おなかに長女がいた。

召集から二年、夫からの便りが途絶えた。疎開先の長野から東京の海軍省に出向いて「主人はどこにいるのでしょうか、生きているのでしょうか」と尋ねた。が、海軍省の役人は国家機密をたてに何も答えてくれなかった。

同省から昭和十八年、「ギルバート諸島方面において戦死」との公報が届き、「英霊」と書いた空の遺骨箱が間もなく送られて来た。下里さんは夫の死が信じられなかった。

終戦。三十三年に再婚、そして死別。時がたてばたつほど、戦争で失った夫への思いが募る。五十九年夏、初めてキリバスを訪れた。砂浜に日本軍の大砲の残がいが転がっていた。朽ち果てた墓標があった。

同国政府に人づてに頼み、歌碑を建てる許可をもらった。五十万円を出しみかげ石で作った小さな碑には自分の作った一番好きな短歌を自分の文字で刻んだ。「この礁の何処に果てし君なるや…」。再度訪れたサンゴ礁の島。除幕式にはベシオ市のテラオイ市長や地元の人たち二百人が出席してくれた。

碑に花を添え、両手を合わせると四十年以上も前の二人の生活が戻ってきた。「学さん、よくやったね、とほめて下さい」。下里さんはこの島で眠る夫にそう語りかけた。

足裏の砂に

（タラワ）下里梅子

この度、キリバス共和国名誉領事であられます栗林徳五郎様の御口添えにより、遺族会会長佐藤宗丕様、役員の田中雄吉様を御紹介され、皆様の温かい御支援の下に、キリバス共和国の許可を得て、ベシオ島平和公園内に、ささやかな歌碑を建てさせて頂くことが出来ました。

骨も無く、英霊と書いた紙片一枚の入った骨壺を、抱いて哭いた、あの日より四十幾星霜、ぬぐい切れぬ夫への想い、天に召されたその地を、自分の足で踏みしめたく！丁度その頃、兼高かをるさんの旅行テレビ放映を見、それにヒントを得て、自分にも出来ない事はあるまいと心にきめました。

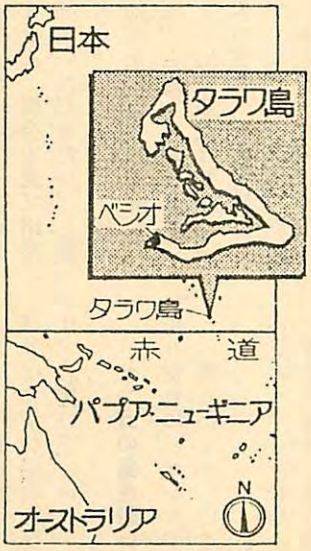
旅行社の方を一人たのみ、無謀の旅に出ましたのが、八四年八月の六日でした。タラワ島には何の予備知識もなく、資料も無く、行先に何があるやらの不安も覚えず、無我夢中でした。

南瀛の碑も知らず、マリヤ観音も知らず、知る人もなく、飛び出した無謀さが、今になって考えて見ますれば、神の思召と言うか、私に与えられた使命と言うか、倖な結果につながりました。

まずバイリキ図書館に行き、オーストラリヤの方でしたが、私の来島の事情を話して、ベシオ島最後の写真がありましたら見せて欲しいとたのみました。心よく応じて下さって部屋に通され、部厚い大きなベシオ島最後の写真を出して来て下さいました。

それは見るも無惨な、凄惨なものばかりでした。折り重なって死んでいる兵士のいずれかに、自分の夫もと思いました時、溢れでる涙を押える事が出来ませんでした。

その夜、オシンタイホテルで夜食の時、栗林先生にお声をかけられまし



た。日本の方と思うが、どうゆう目的で来島されたかと、問われました。夫の死んだこの島の土を自分の足で踏みたかった、と申し上げました。

これが栗林先生との御出逢いのはじめでした。先生に御出逢い出来ましたことは、私にとりまして奇蹟とも言うべき事柄でございました。潮の引いたあとの礁瑚に露出する数知れぬ戦争の残骸を見たとき、この島で死んだ多くの兵士のため、夫のために板片の一つにでも、鎮魂の歌を書いてこの浜に埋めたいと思ったことが、この度の歌碑を建てるきっかけとなりました。

日本に帰りましてから、栗林先生を丸の内の名誉領事室に御訪ねして、歌碑の事についてのアドバイスを心より御願い致しました。

それより先生の御配慮により佐藤会長、田中雄吉様に引きつがれ、色々と曲折もございましたが、この構想が形あるものに成長致してゆきました。

第一石材内海勝様の心のこもった彫刻に拙い書も歌も見事に生あるものになりました。只々皆様に感謝あるのみでございます。

すべての用意がととのい昨六十一年十一月十七日に、玉砕の日二十五日に合わせて出発致しました。田中様には無理に御願い致しまして御同道をおたのみ致しました。

又ベシオ島に於ても、歌碑建立にあたり、国際協力事業団、テ・マウタリ漁業公社、フリートマネージャーの新藤岩男様の温かい御配慮により、タラワ島の名士の方々の御臨席をたまわり嬉しい限りでございました。

テラオイ市長をはじめ島の人々のあたたかさには、第二の故郷が出来た様な思いにさせられました。何をもって皆々様の御恩に報いたらよいかわからない程でございます。

今は只々、皆々様の温かい御配慮に衷心より感謝申し上げる次第でございます。

太陽は赤道の真上にめくるめき戦禍の島はわだつみの中
南溟の孤島によせし執ふかく吾れのすべてとささぐ碑
今もなをただよう霊にこたえむと吾れのあかしを止むいしぶみ
目を覆う瑚礁に散らばう残骸へさばきはいかに天地の神
七十五時間死闘をつづけ逝きませし敵も味方も国を憂いて
怪奇なるさまむき出しに累々と瑚礁にのこる戦狼の跡
残骸に付着せるもの層厚く触るれば身裡へ戦慄はしる
洞窟のごとも思ほゆ司令部跡たたけば壁のほろほろ落つる
褐色の愛し娘メーレよ戦争の跡とうものをいかに見にけむ
歌碑の文字流さむばかりのスコールにずぶ濡れとなるされどすがしき

〒062 札幌市豊平区福住3―8―12

お便りの中から

（ウオッゼ）秋本英郎

拝啓　その後、お変りなく御元気の事と拝察いたします。

さて、去る二月八日の慰霊祭には大変御面倒をおかけいたしました。お蔭様で気持良く久し振りに亡兄と会えたような気持で、心が安まりました。

昨年十一月から十二月と、大変お忙しいなかをお邪魔いたし、色々御指導をいただき本当に有難うございました。慰霊祭の時は、係の方々が大変御骨折りのようでしたが、次回からは私もお手伝いをさせていただければ……と存じます。

当日の総会の後、『会友』の方のお話がありましたが、丁度ウオッゼの方のお話でしたので、良いお話をお聞きした、と喜んでおります。

会員になって間もないので、会の状況等がわかりません。機会を見て出来るだけ参加させていただきたい、と思っております。

現在、私が知りたいことは、会員の住所がわかれば、と思っております。ウオッゼのことを出来るだけ知りたいのですが、個人の住所へ手紙で照会してはいけないでしょうか……。機関誌『環礁』によりますと、ウオッゼの『第二砲台』に詳しい方が居られるようですので、是非私の兄、故・秋本実（みのる）の埋葬場所、また、兄は島民の『アンジエ』と言う人と仲が良かった、と聞いておりますが機関誌『環礁』の第十号、昭和四十四年七月号によりますと、ブラウン島に移ったようです。此れらのことも知りたいと思っております。会員名簿がございますでしょうか。

個人的なことで恐縮ですが、実は来る三月二十一日に、故、実兄と、長兄の『短歌を刻んだ石碑』が本家の墓地に完成して、親族が五十人ばかり集まり供養する予定です。勿論、私が建立するのでなく、私の本家の後継ぎがする訳ですが、此の折に会長様始め皆様からお聞きしたウオッゼの状況等を皆に話したい、と思っております。

さて、色々纏まりのない事を書きましたが、何れまたお伺いして御指導を賜りたいと存じます。文字を書くのは苦手ですので、ワープロで打ちました。よろしく御高配下さい。

終りにまずい短歌を幾つか、記載します。お笑い下さい。

サンゴの島を想いて

折り折りに　サンゴの島に
　眠りたもう　亡き兄偲ぶ
　　戦さ遙けく
南冥の　サンゴの島に　亡兄眠る
　青春の輝き　戦さに埋もりて

ひとたびは　南の島に
　行きたしと　思い続けて
　　六十路越えきぬ
戦いは　遠く去りゆき
『ウオッゼの　島の形も
　　変われり』と云う
木枯らしの　夜半覚めてフト思う
　サンゴの砂も　輝きおらむと
昭和六十二年三月五日
（〒338埼玉県浦和市南元宿　1―15―10）

※　会員同志の文通は是非活発に行って下さい。そのために、寄稿者の住所を記載しているのです。
　会員名簿の作成は検討中です。

（ルオット）　橋　本　政　江

初めてお便りを差上げます。
先日の慰霊祭にお参りさせて頂き、又直会旅行では大変お世話様になりました。
さぞお疲れになられました事と思います。
ハトバスの車中での軍歌に、すぎし昔が思いだされてなつかしく涙しました。又水葉亭では会長様の武田節をお聞かせ頂き最後のあの力強いお言葉は未だ心に強く残って懐しんでいます。
九日は美しい熱海のあの海の日の出を拝む事が出来ました。忘れる事の出来ないありがたい思い出でございます。大変遅くなりましたが一筆お礼申し上げます。
お体に気をつけられて、お過し下さいませ。
今日福岡は雪に見舞れています。
（〒820-05福岡県嘉穂郡碓井町下白井東）

◇　◇　◇　◇　◇

副会長の大役をお受けするにあたって

佐　竹　エ　ス

私はこのたび、はからずも会長から本会副会長に指名されました。
知識も才能もない私は到底その任ではございませんが、「女性会員の声を会運営に反映させる役目を」とのこと故、また、そんな非力な私故にいろいろとアドバイスをし、助けてやらねばと皆様からのご協力が頂けるのではないかと、それを頼りにしてこの大役をお受け致しました。
私は、この会の今後のあり方について次のように考えております。
一、靖国神社のお詣りを何時までも続けたいと思います。それも会員がうち揃って参拝することに意義があると思います。
二、現地に建立した慰霊碑の維持につとめたいと思います。私どもが建てたのですから、維持の責任は当然私どもにあります。遠い島のことですから現地の方のお力も借りねばなりません。そのためには何よりも、私どもの会を長続きさせることが肝要と思います。
三、会員同志の交流を活発にしてほしいと思います。同じ島で散華された英霊たちと、私ども会員同志はお互いに格別の関係にあります。〃環礁〃を活用し、手紙や電話で心の交流を盛んにしましょう。楽しく健康で長生きしましょう。英霊はそれを何よりも望んでおられると信じております。
思えば二十年前、浮田名誉会長と行動を共にして現地慰霊を果し、その後更に多くの方々のお力によって慰霊碑建立の宿願も叶えられた感激は今も忘れられません。
終戦後のあの混沌とした世情から現在の日本を予想出来た人が何人居たでしょうか。この繁栄も皆英霊のご加護あっての幸と信じております。
私はおかげさまで公務員を停年退職した今は毎日が日曜日ですから、会員皆様との連絡などのお手伝いはできます。最近若い世代の会員の増えてくるのは喜ばしいことです。
何時迄も会を続けてゆけますよう皆様の御協力を切にお願いいたします。

環礁

談話室

こんにちわ！　おげんきですか！

① 自己紹介、家族の状況
② 心に残る想い出
③ これからしたいこと
④ 会に対する要望
⑤ その他何なりと

心に残る思い出

（クェゼリン）　大　橋　サ　ク

昭和四十年十二月の或る日〃環礁〃三号が郵送された。
先ず、霊砂を護送して、横須賀に帰港した、護衛艦「あまつかぜ」の写真が目につき、「クェゼリン方面戦歿者遺族会」と記してあった。
はじめて見る〃環礁〃ことにクェゼリン遺族会という文字に心うたれた。
私は、夢中で読み出した。十六頁ずっしり書かれた紙上は一頁一頁が大切なことばかり、またその中に書かれている遺族の方々の文章は同じ思いのせいか涙…涙で字がかすんだ。このような立派な編集をしたものを、遺族の一人一人を探しては郵送してくださった、そのお骨折りに深く感謝し頭が下がる思いがした。
このように、戦死したあとも暖かな組織に守られている自分は幸であると胸の熱くなるのを覚えた。〃環礁〃は、

今も心の支えとして郵送されるたびに全部読ませて戴き大切に保存している。

そしてクェゼリン島墓参の実現。夫の最期の地「クェゼリン島」についた時、よろこびと感激で一ぱいだった。

やがて皆様にお世話になり墓参も終った。いつまでもいつまでもこの地を離れたくない思いをおさえ機上の人となった。

機が上昇をはじめ、やしの木、日本兵が植林したという林等、島全体がみえはじめたとき、思わず手を合わせ言葉にならぬ声で「さようなら」とつぶやいた。隣の座席の方も手を合わせている。同じ思いであったのでしょう。

昭和十九年から今日まで、いろいろ想像するだけの島、とても墓参等夢にも思わなかったことが今現実となって墓参をすまし、機上にいる私……うれし涙というか、別れの悲しさというか複雑な気持で島に別れをつげていた。

今でも目をとじると島全部が目の前に浮かび、夫の冥福を祈っている。

〃島は〃、〃お墓は〃、いつまでも私の心に生き続けている。

これからも今まで同様に会の続く事を念じつつ、会長様はじめ役員の皆様のご苦労に感謝申し上げます。

（〒321-23 栃木県今市市木和田島　一五二六―五五）

（クェゼリン）安藤啓次（73歳）

お元気ですか。昨年は妻がマーシャル訪島に参加させていただき、ほんとうに有難う御座居ました。今年の総会から直会にも同行願って親しく皆さんとお話が出来た事を大変嬉しく思って居ります。

私の住む、小さな町「高萩市」をご紹介します。「勿来の関」…何時か聞いた様な？　そうです茨城と福島の東の県境で桜の名所です。それから南へ15キロメートル程の所に位置し、数少ない「海の見えるダム」そしてアメリカでの悲しい出来事「ケネディー事件」を日本で最初に受信したというパラボラアンテナのある所です。その昔は炭砿の町「常磐炭田の南端」又馬の産地でもありました。遠くは徳川時代、そして明治大正と軍馬で町も賑わったと言われました。今は炭砿も馬もなく日立市の住宅地となりつつあります。

私共家族は孫三人を入れ七人です。小さな店ですが家族だけで頑張っております。

車でも特急でも二時間で東京へ出られます。皆様方此方の方面へお出かけの節はどうぞ一寸お立寄下さいお待ち申し上げます。（駅前通り）

（〒318　茨城県高萩市春日町2―75）

（タラワ）峯島治一郎（39歳）

両親健在の私共は子供三人の七人家族です。戦死された人は私の父親の弟に当り、父から時々話に聞いておりましたが、昨六十一年八月下旬～九月始めにかけて、マーシャル、ギルバート諸島慰霊巡拝団で現地に行った事は本当に忘れる事の出来ない経験でした。二度現地に行く機会に恵まれましたら、気候、風土、地形等、予備知識を充分に取り入れ、南太平洋で戦死された多くの方々の霊を弔って来たいと考えております。

お願い事でございますが、昭和十七年～十九年頃のマーシャル、ギルバート方面の戦況等が分る資料がありましたら分けて頂ければ大変幸甚に存じます。また海図等が有りますならば大変嬉しいのですが。

大変勝手な事を乱書致しましたが、父の意志をくみ当遺族会に協力して行く所存ですので今後共よろしく御指導ご鞭撻をお願い致します。

〒299-45 千葉県夷隅郡岬町谷上一七一七

（ブラウン）星野綾子（58歳）

静岡県駿河小山にて生まれた私は毎日富士山を見て育ちました。縁あって東京は深川に住んでおります。毎日何となく忙しく過し近頃は胃の調子が少し悪く人形町の中央クリニックに通っております。その帰りに年会費を本部事務所にお届けに上りました。何時も何時もお手数をおかけします。

只今私は夫と息子夫婦孫に囲まれ平和な日日ですが、平和であるだけに兄の出征の様子戦死の報を受けた時の父母の顔が思い出されます。父は兄の戦死を悲しみ後を追うように桜の花の咲きみだれた四月に逝きました。母は二人分しっかり長生きし八十八歳にて他界いたしました。嬉しさの中にもちょっぴり淋しい思い出として娘の結婚の日長い人生にはまだまだ種々思い出となる事があるでしょう。その一つとして兄の眠る島ブラウンに行く事です。

役員の皆様には何かと御苦労の多い事と存じます。

（〒135 東京都江東区牡丹1―10―5）

（クェゼリン）大石純一（64歳）

昭和十七年の秋、応召入隊のため私は当時横須賀海軍工廠に勤めていた父と省線を乗り継いで柏駅に降りたち、街並を通り抜けて部隊へと向って行った。

未だ五十歳前の父は口数少なく静かに励ましの言葉をかけ、いづれ面会の出来る日を楽しみにしていると営門で別れたのが今生の最後の父となり、クェゼリン島にて最期を遂げたとは…、今もその時の面影が懐しく浮んでく

る。

戦中戦後六人の子の養育に苦労した母も昨年八月に米寿の年をもって他界しました。

現在私は、永年勤めた役人生活を五十五年に退職し、その後関連法人に入り五年の任期を終え只今は中小企業の顧問として第三の人生に入りました。

（〒238　横須賀市三春町5―33）

（タラワ）中野　フヂエ（老齢者）

五十八年夏健康を害し入院致しましたが、目下注意しながら八十歳の姉と生活しております。こんな情況でもう訪島は無理かと存じますが、五十七年の慰霊行はいまだに心に焼きついて忘れる事は出来ません。

それにつけても今、あれこれ「みたま」のことを論らう世相を悲しんでいます。このまま静かにお眠り頂きたく存じます。この願いは年老いた私共遺族の皆様の思いではないでしょうか。

（〒591　堺市長曽根町一九五〇―一四）

靖国神社のみたま祭

七月十三日から十六日まで、恒例のお祭りが行われます。午前九時から午後九時まで昇殿参拝できます。毎日各種の神賑行事があります。

今年も亦例年のように、本会からの大型献燈が輝くことでしょう。

寄付者芳名

（敬称略）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

◇北海道
黒沢　克己　岩川　あい　下里　梅子　小谷中せい　北原ひで子
◇青森県
伝福　ちゑ　小笠原　廣　下川興三郎　◇千葉県　相川　孝夫　石川　きみ
山田　幹夫　塚原　ハナ　本堂　テフ　川間　つね　川名　博夫　倉田　茂弘
◇岩手県
小杉　リサ　池田　精治　菅原　キイ　高安　コト　高山　貞男　加瀬　よし
◇宮城県
松木　孝子　新田富美子　平形いせこ　広原　チヨ　宮本　豊吉　山室友次郎
◇秋田県
佐藤　敏子　高橋とし子　小室舜司郎　浄永　孝　佐野　和子　豊谷美恵子
小前　ミヤ　奥山　キノ　近藤キクエ　吉田ヤヨイ　野田　喜一　祖田　弘光
◇山形県
渡辺　ミノ　関山富一郎　津久井艶子
◇福島県
石橋　節子　馬上　嶺雄　◇東京都　小山キミ子　荒木　常子
江尻　キヨ　冨田　ミツ　吉津ミドリ　佐竹　エス　岩浪きよ子　飯島浩一老
◇茨城県
堀江　誠一　宮内　はつ　石谷　トシ　五十嵐孝三　江間正二郎
若狭　明光　倉橋　たみ　冨田　保　国松ふみ江　黒川　誠　栗原　利雄
◇栃木県
猪瀬　なか　植木市太郎　小泉　文江　山口　裕子　長谷川智子
大橋　サク　木村恒三郎　田名網武夫　斉藤　幸江　斉藤耕太郎　鈴木つな子
菊地　彦亘　菅沼　昇　田辺　喜好　高橋　鎮夫
◇群馬県
竹本　正平　内海　静枝　田中　雄吉　斉藤　則男
斉藤　勲　森　ゆき江　佃　喜美　鳥居ミサヲ　中村　久　石渡　綾子
日向野キク　園部　重太　番場　信子　畫間　楽平　福原　キチ　鈴木　リン
◇埼玉県
吉田　よね　栗原　タネ　水野　はな　六軒つる子　川名　茂子
近藤マスエ　柴田　貞子　菅井せい子　高林　芳夫　西沢　聰子　吉水　梅子
長谷部なを　藤田　清瀬　福島　レイ　沼山　正英　菅谷喜代子　菅沼　きよ　平松　菊枝
山下　みつ　小林　ミツ　小野　リエ　問々田やす　安井　文子　佐藤　宗丕
◇神奈川県
稲村　かつ　伊沢　ヤス　◇岐阜県　石渡　綾子
竹中とき子　沖立　キヨ　落合　てふ　宮入　貞夫　渡辺　三三　◇新潟県
岡村　栄子　片山　計　熊沢　静子　◇長野県　神田　環　◇静岡県　小林　正道
◇愛知県　伊藤ますの　牛山　光子　大塚　かね　渋谷セキノ
小山内小美賀　川村正一　中村　克己　宮下　礼子　土屋まさ子　坪井　繁男
川越こう子　岡島みね子　高見沢およう　松下　竜二　◇富山県
◇三重県　伊藤　みね　鳥本みさを　吉田　綾　◇京都府　柴田外美子
中根　杉子　山田　登世　棚橋　昭二
佐藤　良雄　高林　セキ　寺島　きよ　中林　ちよ　佐藤　フジ　鈴木　孝輔　三村ともよ　西森サツキ　青木　謹次　小林　正道　助川与富子　水上　文子　杉田　寿雄　佐藤　登志　片桐　さき　坂井　繁男　藤田　ヨリ　村梶　光栄　池田　淑子　金山　深雪　吉光　澄子　柳沢　清信　春枝　鳥羽　田賀　将一　中山　いよ　星野うま子　諏訪　完三　牛山　光子　宮下　礼子　高畠　芙容　中村　克己　高見沢およう　鳥本みさを　吉田　綾　赤堀　桂三　飯田たつ子　大畑はるゑ　曽根　エイ　野崎　豊秋　服部くにゑ　山田　登世　安藤　昌子　大原　儀一　山田　あき　岡島みね子　伊藤　みね　近沢　あき　中根　杉子　村上　増枝

安威　千鶴　長谷川田鶴
◇大阪府
堀家かつ江　伊藤　登　中野フヂエ
◇兵庫県
清水つちゑ　柴崎　晃　枝光　剛郎
安福　道明　山野イクエ　山本　允子
◇和歌山県
林　繁　松尾　正輝
◇島根県
福井　栄子　木村　久子
◇岡山県
宇山　アサ　中島　清子
金子ミサヲ
◇広島県
江坂　富子　小林アヤ子
田口マサヨ　藤本　正　松本タカミ
川西シヅコ　大年ユキミ
◇山口県
嶋田　チヨ　下村チエ子
道源　ヒサ　山田チヨコ
◇徳島県
栗本　孝一　坂本　栞
◇香川県
秋山　武士　石田　藤美
奥田　和広　富田トシ子　松原ユキエ
◇愛媛県
井原トノヨ　伊藤　梅子
久保田泰子　小西アキヨ　宅見　運保
西　サクノ　清水　朝美　松友　都
三好　邦博　山本　峰子　橋　ハルキ
泉田　君子　渡部　守　森田　静子
◇高知県
浜田喜次太郎　五百蔵国尋　入福　菊恵
◇福岡県
小野　林　吉松　貞子　家迫　ソヲ
樗木孝二郎　川上ミサオ　近藤シヅエ
深川　芙由　西原　康雄　秦　サカエ
◇佐賀県
田中　ノエ　森　キヨ子　金子庄之助
宮崎　ツヨ　犬山タツノ　坂本　トセ
◇長崎県
板浦　重雄　大石　春見
田村サヨ子　林　文枝　福田　音和
前田　フサ　山下　タエ
◇熊本県
北村　権蔵　片山　玲子　鹿島　サク
土田　利子　塚野ヨシ子　村上佳寿子
◇大分県
植川　二男　石塚　文子　衛藤　金喜
橋本　良吉　桃田志津代　南　みつ
◇宮崎県
稲留　タメ　友枝カオリ
森　フサエ
◇鹿児島県
川畑ツルエ　神川　カツ
徳重ミツ子　浜崎　武一　森　テル子
和田　芳久　原田　惟行　黒岩キミエ
染川トメヨ　村上　ノキ
◇沖縄県
小浜　春恵　宮城　幸子
◇会　友
篠崎　英夫　星川　武　桑　一
中島新之丞　大幡　幸吉
豊谷　秀光　須藤　伝　後藤　清見
山下　治　岡山　尚信　江藤　圭一
十二　徳次　井上　義夫　瀬沼　光久
土屋　太郎

（以上は61年11月1日から62年5月31日までに入金の三一五名で、金額の合計は一、九六四、四〇〇円であります）

本部だより

☆郵送方法の変更……

本会は、永年にわたり〝環礁〟の発送に記念切手を貼っておりましたが、今回からは、料金を別納郵便とさせて頂くことにしました。

味気なくなったとの御不満の声も聞こえてきそうですが、本会を少しでも永く続けてゆくためには事務の簡素化が是非共必要でありますので、御寛容の程をお願いいたします。

☆会員名簿刊行……

会員名簿を作ってほしいとの声の高まりをうけて、本部では只今計画を練っております。

目下のところ、会費納入者だけを登載し、登載者には無料で配布することを基本方針として計画しております。

会員名簿資料をまだ出していない方や出した後で変更のあった方は、はがきで次のことをお知らせ下さい。

「戦歿者の氏名、陸海軍の別、戦歿場所、遺族との続柄、住所、氏名、電話、わかっている方は部隊名等。」

☆近況とお便りを……

会報〝環礁〟は同じ境遇の私どもの心のふれ合いの場です。お気軽に自由に誰にも遠慮気兼ねなくお話し合いのできる場です。御活用下さい。

（10頁より続く）

によるとパイロットは乗客の安全の為に引き返したとの事である。

マジュロ離陸55分後に異状が起った。727型機の3つのエンジンのうち右のエンジンに異状が起ったのだ。機はマジュロまで20マイルの地点で余分な燃料をすてて、無事着陸した。

乗客乗員は無事であった。グアムより替りのエンジンをとり寄せて故障したエンジンと交換する予定である。

5月15日号より

『ローラ岬に赤潮発生』

マジュロ発　5月11日

ローラ岬の住人は魚の死がいと浜辺の汚染について申し出た。

マーシャル環境保護団体（EPA）は申し出を受けて最近浜に打ち上げられたゼリー状の物質と変な臭いについて調査をはじめた。EPAのレイチェル・ダコヴィッツさんが調査を指揮し、次の様に語った。状況は自然現象であり恐れることはない。彼女によると大量の藻が浜に打ち上げられているとの事である。

藻は大量発生すると魚を殺し、他の海の生物をも殺してしまうが人間には害はない。水泳やつりはしても良いがこの近くはなるべくさけた方が良い。藻の多量発生はローラ岬の開発がはじまった数年前よりのことである。

※86年12月12日号の「キリバスコーナー」に、札幌の下里さんがベシオ島に夫を想う歌碑を建てたこと（本号11頁）が紹介されました。

（山口良二訳）

本部
〒103 東京都中央区日本橋人形町一―八―二
マーシャル方面遺族会
電話　〇三―六六一―八七六〇番
FAX　〇三―六六一―六二四一